

CSOアワード2019「大阪市長賞」受賞
「一般社団法人 codomoto ままっち」×市民局長 記念対談

令和2年2月25日 ふらっとひろばままっちにて



左:馬場市民局長
右:codomoto ままっち代表 林静香さん

大阪市内の地域課題の解決に向け、ビジネスの手法を用いて取り組んでいる優れた事業を表彰する「CSOアワード大阪市長賞」。

2019年度の受賞団体「一般社団法人 codomoto ままっち」さんは、情報紙「ままっち」やポータルサイト「codomoto.jp」による地域に密着した情報発信のほか、企業からの委託を受けて子育て世帯向けのイベントなどを企画・運営されており、地域や社会から孤立しがちな子育て中のママ達の支援をしています。しかも、運営スタッフもみんな子育て中のママ達。

対談では、15年も続いている情報発信業務を始められたきっかけや、代表の林さん、スタッフの松下さんの活動に対する想いを中心にお聞きしました。

まずは、どのような想いで活動を始められたのかお聞かせください。

【codomoto ままっち:林氏】

自分自身が阿倍野区の転入者で、結婚してしばらくの間は特に不自由もなかったんですが、子どもが生まれてみると幼稚園や保育園、小児科がどこにあるのかがまったくわからず…。自分自身が地域の子育て情報が必要としていました。15年前はそんなにインターネット上にローカルな情報もなかったので、どこを見ていいかもわからない状態でしたね。

もう一つは、出産前は編集に携わる仕事をしており、結構忙しい日々、いわゆるスケジュール帳が埋まっているような生活をしていたのが、子どもを産んだ瞬間にスケジュール帳が真っ白に。働いている友達が会いに来てくれて、「一日中何してるの？」って聞かれたときに、オムツを替えて授乳して…子育てを一日中やってるけど、「これしてる」って言えなくて。育児で忙しいんだけど、仕事みたいに「今これしてるんだ」、というようなことじゃない。で、スケジュール帳は真っ白で、健診がポツン、ポツンと入る、という状態がしんどかったですね。

【馬場市民局長】

そういう方は多いと思いますよ。フルタイムでバリバリ働いていて、子どもができたことをきっかけに、家事、育児に追われる生活にガラッと環境が変わってしまう。子育てってものすごく重要なことなんだけど、やらない

としょうがない状況にポンと追い込まれて...っていうしんどさがある。

【codomoto ままちっち:林氏】

そうですね。子育てはすごく大事な仕事ですし、評価を求めるものではないことなんですけど、子育てしかして
いない自分がちょっとしんどいなというのはありました。よく社会から孤立してしまうと言いますが、すぐ預けて
働くっていう選択も当時の自分の中にはなかったので、これがずっと続くのかという不安もありました。

もう一つは、当時子どもが加害者になるという事件
が続いていました。赤ちゃんがほんの10数年後に
加害者になってしまうということが、すごくショックで
した。いろいろと考える中で、つながっておくとい
うのは大事なんじゃないかと。気軽に声をかけ合え
られるような関係づくりというか。自分の子どもにと
っても、お友達や周りの子どもも幸せであることが
大事なんじゃないかと感じたんです。



- そのような想いをどのようにしてカタチにされたのですか？

【codomoto ままちっち:林氏】

例えば情報一つをシェアすることで楽になったり、みんなでゆるくでいいから、つながって子育てできればい
いな、と。しかし、当時は子どもがまだ1歳だったので、何かできたらいいな、とふんわり考えているぐらいでし
た。

そんなとき、地域で子育て支援をしている方とお話する機会があって、こういう事ができたらいいなって考えて
るんです、と話すと、「応援するからやろう！」と行ってくださって...

【馬場市民局長】

では、その方が背中を押してくれたんですね。

【codomoto ままちっち:林氏】

そうです。区役所や社会福祉協議会とつないでくださったり、阿倍野区の子育て支援連絡会にも入れていた
だきました。自分一人でママに声をかけて...という感じではなかったので、すごく恵まれていたと思います。

【馬場市民局長】

子育て中に、社会から切り離されたような感覚を持って、何か社会のためにやりたい、同じような思いをして
いる人と繋がりたいと思う人はわりと多いと思いますが、そのために実際に行動を起こすということは、すごく
難しいですよ。そのハードルを越えられるように、ボランティア活動の先輩がアドバイスをくれて、色々な支
援者の方とつながったネットワークができたんですね。

【codomoto ままっち:林氏】

当時、阿倍野区にも子育てサークルが少しあって、そこで「こういうのしようと思ってるけど、一緒にやってくれる人！」と声をかけてくださって。それで20人弱ぐらい集まりました。

当時は遊びに行く場所もイベントも少なく、公園ぐらい。園庭開放をしている幼稚園や保育園も今より少なかったし、そういう意味では、行き場はないけど時間はいっぱいあるって人が多かった時代かもしれないですね。実は、1回目の編集会議をした日が雨だったんです。私の前職の上司が、「子連れのイベントで雨が降ったら3割キャンセルになる」と言っていたので、「何人かはキャンセルになるだろうな」と思っていたら、誰も休まなかったんです。すごいなって、一世代上の人から聞いていた感覚とちょっと違うかもと思いました。

「小さく働く場」を提供されています。

【馬場市民局長】

この活動で「小さく働く場を創っていく」ということが、すごくいい発想だと思っています。社会とつながっていたい、社会に対して還元する仕事がしたいと思っても、その時間ときっかけがないということで、鬱々と思っている子育て中の方もたくさんいると思います。一参加者として子どもと一緒にイベントを楽しむだけでなく、できる範囲で無理せず働くことができれば、自分をステップアップさせる場にもなり、継続的な活動にもつながっていきやすいと思います。

【codomoto ままっち:林氏】

そうですね。私自身も出産後に思ったのが、1か0の選択肢しかないな、と。今は2,3日子どもを預けて働くという選択もしやすくなっているかと思いますが、当時はフルタイムで働いてフルで子どもを預けるか、まったく0か。子どもともう少し一緒にいたいという人のために、そういう働き方ができる場があれば...と感じました。私たちの活動も当初はボランティアでしたが、少しずつデザインの仕事や企業さんから依頼を受けるような機会が出てきたんです。それも子どもと一緒にでもできるようなお仕事もあって。

先日単発でお仕事に関わってくれた方が、「数年ぶりに自分でお金を稼ぎました」と言ってくださって。本当に数千円のお仕事なのですが、喜んでいただけで良かったと思いました。



【馬場市民局長】

確かに、大阪市は待機児童対策で保育所を増やしてはいますが、もう少し週に何日かだけ預かる保育が増えると、働きたいと思っているお母さんたちの選択肢も増えますよね。

都心に住んでいると近くにご両親もいなくて、夫婦だけで子育てしている人が多い中で、フルタイムで働きたいという人だけでなく、仕事をしながら子どもとできるだけ一緒にいたいというニーズにも応えられるように、行政としても多様な保育サービスを充実させることで、より働きやすい環境を作っていく必要がありますね。

【codomoto ままっち:林氏】

働きながらも子どもとももう少し向き合えたらいいなと思いますね。

【馬場市民局長】

小さく働く場から社会につながっていくことをきっかけにして、次はもう少し大きく、と自分自身のスキルを高めながらやっていけるというのは、すごくいいですね。

【codomoto ままっち:林氏】

そうですね、なんだかんだそれぞれのママたちのスキルアップにつながっているのかな、と思っています。依頼書を作ったり、取材に行くのもそうですし、会議に出てアイデア出しをしたり、それを基に情報を集めたり…。子育てとはちょっと違う、仕事脳的な部分をここでは求められるというか。

【馬場市民局長】

段取り力とか、対外的な力をね。

【codomoto ままっち:林氏】

しかも子どもがいながらのスケジューリングとか。復帰するときのための練習ですね。

【codomoto ままっち:松下氏】

子どもがいてこれだけできたら、子どもを預けられたらもっとできるんじゃないかという自信にもなります。

- スタッフはどのように集められているのですか？

【codomoto ままっち:林氏】

スタッフは、冊子を見てずっと好きで…ちょっと子どもも大きくなったから手伝いたいって人が多いですね。好きでいてくれた思いがある人が自然に集まってくれたので、ここまで続いているのかな、と思います。

【馬場市民局長】

それはすごいですね。ボランティア募集などは紙面に載せているんですか？

【codomoto ままっち:林氏】

たまに載せています。松下さんも読者からですよ？



情報紙 ままっち

【codomoto ままっち:松下氏】

そうなんです。1人目~2人目の子育て中に読ませてもらっていて、3人目の時に初めて産休・育休が取れたので…。戻る場所があって、もちろん子どものためのお休みですけど1年間あったので、ずっと好きでお手伝いしたいなと思っていたので、期間限定ですけどお手伝いしていいですか、と声をかけるとウェルカムと言って受け入れてくださって。一生懸命走り回って一緒に作らせてもらったらすごく楽しくて。復職してからもやっぱり好きな事なので、できる範囲でお手伝いさせてもらっています。



スタッフの松下さん

- ままっちの冊子は、無償のボランティアスタッフが関わっておられるんですか？

【codomoto ままっち:林氏】

スタッフも色々で、ボランティアだからやりたいという人もいます。だからこそ今までボランティアで続けてきたんですけど。ただちょうど今、過渡期に入っていて、やっぱりお金もほしいスタッフもいるし、どっちにシフトしていくかというのは、常に悩みながらやっています。ボランティアでいつまでできるのか？という不安もあります。

- 一緒にやりたいという人を集めるための工夫などはありますか？

【codomoto ままっち:林氏】

ここ数年は、子育て中も仕事を継続している人が増えてきて、単に「ボランティアスタッフ募集」では人が来なくなっているの、今回初めて、モニターさんを半年間という期間を決めて募集する形にしました。2回募集して、どちらも5人ずつくらいは応募がありました。今の時代に合っていたのかな、と思います。

【馬場市民局長】

モニターさんには、「モニター座談会」に参加してもらうだけですか？

【codomoto ままっち:林氏】

そうです。「しゃべりに来て～！」という感じで、それで残ってくれたらいいな、とは思いますが、そうやって卒業しても、例えばメールで「この意見ちょうだい！」っていった時に、協力してくれる人が何人かでも増えていくのは、むしろその方が強いんじゃないかなと思います。一部の人でぎゅっとやるよりも、色んな人が少しずつ色々な意見をくれる方が、「多様」な紙面づくりにつながると思います。



来た時に「一緒にやらない？」って声をかけてもらえるのは、迷っている人にとってはすごく背中を押してもらえますよね。

【codomoto ままっち:松下氏】

ままっちのハードルが低いところは、全てにおいて「子連れでいいよ」と言ってもらえるところです。「子連れでいいから」と言われると、じゃあ行ってみようかなと思えます。

【codomoto ままっち:林氏】

参加条件が「子育て中」ですからね。(笑)

ただ、子育て支援が充実してきたことで、ママたちが主体的に動かなくてもよくなっていると感じています。私の少し上の世代って、日本全国サークルがたくさんできた時期で、それはなかったからみんな自分で作ったんですよね。でもこれだけ支援が充実してくると、自分で作らなくても行って遊ばせてもらえる所を転々とするだけで、十分楽しく乳幼児期・育休中を過ごせる。とってもありがたいことですが、自分で主体的に何かをする機会は逆になくなってしまったかな、と思っています。

【馬場市民局長】

お客さんとして参加するだけになってしまっているということですね

【codomoto ままっち:林氏】

codomoto ままっちでは、PTAをするスタッフが多いんですね。おそらく参加へのハードルが下がっていて、手伝えることは手伝いますよ、とあまり気にせず言える。「できることはやります」という感じの人が増えるのは、社会的にはいいのかな、と思ったりします。特に行政の人はそう思われるんじゃないでしょうか？

【馬場市民局長】

市民協働というのはまさにそのことです。行政だけでできることは本当に限られていますので。

【codomoto ままっち:林氏】

みんな経験もスキルもあるので、そういう力を発揮するとか、関われる場であれたらいいなと思いますね。それを子どもと一緒にできたり、子どもが見てるっていうのは、すごく大きいと思います。



私の友達で、PTAをずっとやっている人の言葉が忘れられないんです。「『PTAなんかやって損やん』と言われるけど、自分は全くそんなこと思っていないくて、むしろ得していると思っている。その姿を子どもが見ていて、それがきっと子どもに活着ているだろう」と言っていました。その通りだと思いました。いい影響があるだろうなと。

【馬場市民局長】

おっしゃる通りですね。親が前向きに生きていること自体が、子どもにいい影響を与えますよね。小学生にもなれば、親がどんなことを考えているのか、自分の教育のことばかりじゃなくて、外にどんな興味関心があって、社会的な活動も含めて色々な事に悩んで生きているんだ、というのを、子どもなりに見ているというのが、それ自体が良い社会教育になりますよね。

- 活動を続けるための資金はどうされているのですか？

【codomoto ままっち:林氏】

ままっちの冊子については広告、サイトの方も掲載費のような形でいただいています。過去には長年助成金もいただいていた。あとはショッピングモールでイベントの企画運営を受託しています。子連れで参加するスタッフと、子連れではないスタッフを組み合わせで運営しています。



昨年のイベントの様子

【馬場市民局長】

イベントは定期的にやっているんですか？

【codomoto ままっち:林氏】

毎週火曜日に実施しています。私たちが企画をして、講師の先生を手配して...。(現在は新型コロナウイルスの影響でインスタライブにて実施されており、スタッフのみなさんの新たなチャレンジの機会にもなっているそうです。)

あとは、アウトソーシング的な形で、テーブル起こしや入力作業というお仕事をいただいています。ママ達も一人で仕事を受けるとなると、その期間中にも子どもが熱を出したら...というのもあり、なかなか踏み出せなかったりするんですけど、ままっちでは、仕事を何人かで分担して、一人に何かあってもカバーできる形で請け負ったりもしています。

行政に対する要望などがあればお聞かせください。

【馬場市民局長】

大阪市は、子育て支援を充実させてきていますが、やっぱりここはどうか？とか、逆にここまでやらなくてもいいんじゃない？と思われることはありますか？

【codomoto ままっち:林氏】

阿倍野区では15年以上前からすでに子育て支援連絡会があって、本当に色々な団体が参加しています。私たちが任意団体の頃から入らせていただいて、そこでみなさんに冊子の配布に協力していただいている、非常に助かっています。情報を行き届かせるというのは、絶対必要だと思いますね。広報紙も阿倍野区では新

聞を取っていない人は、申し込まないと広報紙が届かないので。

区によっては、地域に委託して、見守りなどを兼ねて全戸ポスティングをしています。

【codomoto ままっち:林氏】

それは地域にもお金が入るし、いいですね。

他には子育てアプリを作っている区もありますが、「ママの力をもっと活用してもらえればさらにいいものになるんじゃないか」と思います。難しいとは思いますが、有償でママ達の社会参加の場になるように工夫していただけると、中身としてもリアルに充実できるんじゃないかと。レポーターを募集している区もありましたけど、ボランティアなんですよ。そこなんかも上手に使い道を考えていただけないかな、と思いますね。

15年も続いている活動。大切にされていることはありますか？

【codomoto ままっち:林氏】

子育てはひとりですべきことではないと思っています。子どもたちが、たくさんのゆるやかなつながり・見守りのなかで育ててほしいな、と。

【codomoto ままっち:松下氏】

私は子どもが3人いるんですが、親も今は近くにいないので、パートナーや友人とチームで何とかするしかない。近所の友達も巻き込んで、あの人もこの人もお願いします、と。(笑)

【馬場市民局長】

そうですね、同じ年代の子どもを持った友達というのは、有力なパートナーですよ。そういうネットワークを何とか自分で作りながらでないと、やっていけないですよ。

【codomoto ままっち:林氏】

それを、乳幼児の間、育休中の方にこういう場で出会って作ってほしいな、と思うんです。でも今の難しさなのが、出会いを避けている人も多いですよ。すごく探り探りで、公園とかつどいの広場みたいな所でしょっちゅう会っていても、なかなか踏み込めない。「公園デビュー」とか言っていた時期からそうかもしれないですけど。なかなか、子どもを預けあえる関係にまで踏み込めない。でも私も人見知りなのでよくわかります。だから、ままとちのようなママ友ではなくプロジェクトに参加する、という形だと関係が築きやすいというか....



【馬場市民局長】

遠慮しちゃうんでしょうね。でもこういう所で出会い、預けあうところまではいかなくても、何かあったときに「ちょっと相談に乗って」「ちょっと聞いて」という愚痴やしんどさを言える人がいるっていうのは、全然違いますよね。

【codomoto ままっち:林氏】

そういうつながりを創れる場を、リアルでも、「ままっち」(冊子)を通じてでも提供したい。まずは地域に出たいと思います。お店の人とでもいいので、しゃべるって大事ですよ。情報を得るだけならネットや冊子だけで事足りるんですけど。

【馬場市民局長】

誰ともしゃべれない日が二日くらい続くと、なんだかどんどん自分の心がしんどくなってきますよね。(笑)



【codomoto ままっち:林氏】

特に女性はしゃべるだけで解決することってまあありますよね。(笑)

【馬場市民局長】

誰かにつながっているっていう実感がある方が、絶対安心ですよ。

【codomoto ままっち:林氏】

子どもにとってもそうだな、と思います。子どものことを知ってくれている人を地域にどれだけ作れるか、「この子はあそこの子やな」とわかってきている人がたくさんいるに越したことはないという気がしますね。それに、他の人の子育てを見るってすごく大事だなぁと思います。「そんなやり方があるんだ」もだし、「そんなやり方でいいんだ」もだし、「これでもいいか」、「それ真似してみようか」とか思う機会が今は本当に少ない。

【馬場市民局長】

そうですね。完璧じゃなくちゃいけないと、つつい思っちゃうんですよ。

【codomoto ままっち:林氏】

表に出てくるのってキラキラしたい例ばかりなので、そういうのばかりを見るのはしんどいですよね。

【codomoto ままっち:松下氏】

ままっちの居心地がいいのはそれだと思います。ネットなんかで検索するとキラキラしていることが、本当にしんどいことしか見られないけど、普通の、「それでいいやんな」「あるある やんな」というのが欲しくて。顔を合わせて話を聞けると安心できますよね。

【codomoto ままっち:林氏】

冊子の口コミでも色々な意見を載せようっていうのはずっと気をつけていました。難しいですけど…。東日本大震災の後も、放射線に関して色々な意見を載せました。ガイガーカウンター(放射線測定器)を借りてきて、区内の公園を測定したりも。なかなかそういう話って、ママ友同士ではしにくかったりするので、だから色々な声を載せたりしていました。

最後に、今後の展望をお聞かせください。

【codomoto ままっち:林氏】

私たちの活動が取り組んでいる課題は、決して緊急性のあるものではないんです。貧困の子どもが目の前にいてそれをサポートする活動でもなければ、DV被害に遭っているママを助けられるものでもないんですけど、でも、見えにくいけど必要としてくださる方もいて、そこに使命もあるとは思っているので、いろんなママがいろんな形で関われる状態というのを続けていって、多様な子育てをみんなでシェアしたい。知ってほしい。今はこれだけ情報があって今のママの方が知ってそうなのに、意外に大事なことで届いていないことがあるな、と感じることも。例えば行政が発信する情報が届いていないこともあると思うので、その中でママ達、パパ達、子どもに関わる人達が知っておいた方がいいかな、と思う情報を届けられたらいいなと思います。色々な人に関わってもらえる場、媒体でも場所でもイベントでも、自分たちで参加してもらいながら作っていったらいいなと思います。



【馬場市民局長】

すごく重要なことだと思います。ままっちさんのようなところが、色んなところで広がってほしい。子育て支援の団体も増えてきましたけど、その中で老舗として(笑)、そのノウハウをみんなにも伝えていただければと思います。

【codomoto ままっち:松下氏】

最初の立ち上げのきっかけから、ブレずにかわってない「ふんわりゆるくつながる」というのがいいと思いますね。

【馬場市民局長】

まさにそれが求められているんだろうなと思います。何でも受け入れるよ、っていう土壌があって、みんながふらっと行きたいなって思える空間があるというのがすごくいいことだと思います。今後も子育て中の方や社会のニーズをとらえながら、どんどん進化を続けていただきたいと大いに期待しております。